

Parade556

お
迎
え

【人物一覧表】

御子柴良治 (17)	不良高校生
御子柴良治 (54)	警察官署長
御子柴春子 (45)	良治の母 (中華料理屋勤務)
御子柴春子 (82)	同 (認知症)
寺田慎太郎 (42)	警察署副署長
桃田清吾 (29)	無職 (犯罪者)
良治の高校時代の不良仲間	
警察官たち	

【あらすじ】

不良少年だった御子柴良治を、母・春子はいつも警察官まで迎えにきていた。そして時は経ち、御子柴は自分が若いころに連行されていた警察官の署長になっていた。春子は認知症を患い、息子を迎えに警察署へ訪れるように。御子柴を見ても、春子は自分の息子だと気づけないほど症状は進行していた。

御子柴の管轄内で少女通り魔事件が起こり、部下の寺田が所轄の経験から容疑者の桃田を逮捕する。そして少女殺害を認めるも、ホントに手柄をとられてしまう。それと同時に、御子柴は母が交通事故に遭い、亡くなったことを知る。

少女の殺害現場での式典を終えたあと、母が事故に遭った現場に向かう御子柴と寺田。御子柴は、桃田が逮捕されたのと同じように母が亡くなったことでホツとしたと告白し、自責の念からその場で泣き崩れる。

【本文】

○東京都内（下町）猪瀬警察署・全景

御子柴良治（17）と二人の仲間、警察

官たちに警察官の中に引っ張られていく。

御子柴「さわんじゃねえよ」

仲間A「殺すぞ」

警察官A「暴れるんじゃない」

警察官B「毎回毎回、おまえらは」

○同（夜）

御子柴春子（45）、駆け込んでくる。

○同・留置場（夜）

御子柴、ふてくされて座っている。

警察官A、やってきて、

警察官A「おい御子柴。お迎えだぞ」

御子柴、舌打ち。

そばにいる仲間たちに冷やかされる。

仲間A「ママのお出迎えかよ」

仲間 B 「ママと手つないで帰れよ」

御子柴 「うるせえよ」

警察官 A 「黙れ。おまえら。出る。御子柴」

御子柴、ため息をついて大仰に立ち上がると、

御子柴 「クソが」

御子柴、留置場の鉄さくをけ飛ばす。

警察官 A 「こら（御子柴の頭を殴る）」

御子柴 「いてえな。何すんだよ」

警察官 A 「いいから。出る」

御子柴、警察官 A に引っ張られて出ていく。

○同・待合室（夜）

春子、黙って座っている。中華料理屋の名前が入ったエプロンをしている。春子、頭につけていた頭巾を外し、手に持つ。ぎゅっと力を籠めるも、あつとなり、

春子 「ダメダメ。会社の大切な備品」

御子柴、警察官 A と共に入室。

御子柴 「なんだよ。縁切ったんだろ」

春子、立ち上がると御子柴の頭を殴る。

春子 「バカ」

御子柴 「殴るなよ。すぐ」

春子 「世間様にご迷惑かけて」

御子柴 「俺は、やりてえよーにやんだよ」

春子 「バカ」

御子柴 「だから、殴るんじゃないよ」

春子「（警察官 A に）申し訳ございませんでした」

警察官 A 「前も言いましたが、本気で軌道修

正をしないと息子さんの人生、取り返しの

つかないことになります」

春子 「はい。重々承知しております」

御子柴 「別に。どうなってもいいよ」

春子 「バカ。おまえは」

御子柴 「うるせえな。縁切ってくれよ」

春子、御子柴を殴りつける。

○同・全景（夜）

御子柴、春子に引っ張られて出ていく。

警察官 A・Bが見送る。

春子、何度も振り返り、警察官たちに

ペコペコ頭を下げる。

警察官 A 「良いお母さんなのにな」

警察官 B 「ほんとに、逮捕する日がくるかも

しれませんね」

警察官 A 「今のままならな」

○同

T・「37年後」

○同・留置場

酔っ払いが寝ている。

○同・待合室

警察官が老婆と話している。

○同・署長室のある階の廊下

しん、と静まり返っている。【署長室】のプレートが見える。

○同・署長室

御子柴良治（54）、警察官の姿で座っている。

テーブルの上にプレート【猪瀬署・署長 御子柴良治】。

寺田慎太郎（42）と話している。

テロップ【猪瀬署・副署長 寺田慎太郎（42）】

御子柴「ホンテンの捜査は、どこまで進んでいる？」

寺田「防犯カメラのないところなので、なかなか厳しいようです」

御子柴「笑うな（と言いながら御子柴も笑う）」
寺田「所轄のせいだそうです」

御子柴「キャリアさん達は大変なのさ」

寺田「足跡はとれてます」

御子柴「あいつで間違いないのか」

寺田「ええ。今度こそ」

御子柴「よし。別件で引っ張ってこい」

寺田「はい」

ドアをノックする音。

御子柴「どうぞ」

若い女性職員が入室。

職員「署長。すいません…また」

御子柴「ああ。ありがとう。(寺田を見て)あ

とは頼む」

寺田「承知いたしました」

御子柴、立ち上がる。

寺田と女性職員、気の毒そうに御子柴を見る。

○同・待合室

御子柴春子(82)、ちよこんと座っている。その丸まった背中は、不良高校生だった息子を迎えにきたときと同じ。

御子柴、入室する。

御子柴「どうされましたか？」

春子「あ。申し訳ございません。息子を迎えにまいりました」

御子柴「息子さんは、来ていませんよ」

春子「先ほど、お電話いただいたんです。ほんとに、ほんとにできの悪い息子で。申し訳ございません」

御子柴「息子さんは、来ていませんから」

春子、御子柴のネームプレートを見て、

春子「あら。同じ苗字。下の名前もあの子と一緒にだわ。珍しい。御子柴なんて。親戚かしらね」

御子柴「ええ。そうかもしれませぬね」

春子、コロコロとした笑顔になる。

御子柴「よろしければ、ご自宅までお送りしますよ」

春子「自分で帰れますから。あの子を連れてきてくださいませんか？」

御子柴「ご安心ください。我々が責任をもつて、息子さんを家に連れて帰りますから」

春子「何から何までご迷惑おかけしてしまっ

て」

御子柴「いえいえ。かまいませんよ。それが

我々の仕事ですから」

春子「あの子も、警察官になってくれたらいいのに」

御子柴「…」

春子「世間様のお役に立てるような人間になつてくれないかしらね」

御子柴「(囁くように) もう、なってるよ」

春子「悪いことばかりして」

御子柴「もう、縁を切られたらどうですか？」

春子、それまでペラペラ喋っていたのに黙り込む。

御子柴「そちらの方が、お母さんも安心してしよう」

春子「…」

御子柴「ろくな人生を送りませんよ。今度は、本当に逮捕されてしまうかもしれない」

春子「…」

御子柴「縁を切った方が気持ち楽になりま

せんか？」

春子「（ふっと笑って）…それはできません」

御子柴「どうしてです？迷惑ばかりかけているんでしょう」

春子「うん。うん」

御子柴「縁を切れば楽になりますよ」

春子「…それでも、息子ですから」

御子柴、言葉を失ってしまう。

○同・全景

春子、女性職員に手を引かれて出ていく。

御子柴、その背中を寂しそうに見つめる。

寺田、現れ、

寺田「署長。すいません」

御子柴、警察官の顔に戻り、

御子柴「どうした？」

寺田「現行犯で捕まえました」

御子柴「そうか」

寺田「ホントの連中には気づかれていませ
ん」

○同・会議室前の廊下

会議室の中から、マイクで叱咤する男
の声がある。

壁に掲げられた捜査本部の戒名【幼児
通り魔殺害事件】

○同・留置場

桃田清吾(29)、ベンチに座っている。
せわしなく貧乏ゆすりをしながら、左
手の親指の爪を噛んでいる。親指の爪
はギザギザ。

○同・取調室(夕方)

寺田が、桃田を取り調べている。

○同・署長室(夕方)

御子柴、窓の外を見ている。

夕景が町を照らしている。

昔ながらの下町があるエリアと再開発

中の高層ビル群が一望できる。

御子柴のスマホが鳴る。液晶画面に【寺

田副署長】

御子柴「どうした？」

寺田（声）＊以降、寺田「吐きました。みりちゃんをやったのもアイツです」

御子柴「よし。よし」

寺田「ですが…ホンテンにさらわれました」

御子柴「そうか」

寺田「ウチに、ホンテンの犬がいます」

御子柴「そこは探るな」

寺田「しかし」

御子柴「吐かせたのは所轄だ。だろ？」

寺田「悔しいです」

御子柴「よくやった。ほんとうによくやった」

寺田「…自分、納得できないです」

御子柴「だよな」

寺田「吐かせたのはウチですよ」

御子柴「そうだ。ホンテンじゃできなかった」

寺田「わかりました」

御子柴「ありがとう」

寺田「失礼します」

御子柴「お疲れ様。今日は早く帰って綺羅ち
やんと遊んでやれ」

寺田「恐縮です」

御子柴、電話を切ると、大きく息をつ
いて椅子に座りこむ。

心底、ホッとした顔をしている。

また寺田から電話がかかってくる。

御子柴「どうした？」

寺田「あの…」

御子柴「どうしたんだ。まさか桃田が…」

寺田「いえ、署長。署長のお母さまが…」

御子柴「わかった。待合室に通しておいてく
れ」

寺田「いえ。違うんです。事故に遭われて。

今、救急病院に」

寺田、慌てて机の引き出しを開け、カ

バンを開く。個人携帯を開くと、着信の連発。

○救急車の中（夜）

治療を受けている血まみれの春子。

春子のカバンからぶら下がっているキ

ーホルダー【認知症を患っております。

猪瀬署・署長 御子柴良治 090 -

1254 - 〇〇〇〇までお電話ください】。

○警察署・署長室の廊下（夜）

御子柴、駆け出していく。

○みのりちゃん殺害現場の駐車場

たくさんの花やお菓子、みのりちゃん

へのメッセージなどが置かれた簡易祭

壇が用意されている。

多くの報道陣が見守る中、ホンテンの

捜査課長が手を合わせる。

御子柴と寺田、離れたところからその

光景を見ている。

× × ×

散会。

御子柴、ひとり歩き出す。

寺田「署長。どちらへ？」

御子柴「ああ。ちよつとな」

寺田「私も、同行してよろしいでしょうか？」

御子柴「…かまわんよ」

寺田「失礼します」

御子柴と寺田、並んで歩き出す。

○交差点

路肩に、花が置かれている。

寺田「ウチの綺羅が」

御子柴「ありがとう。おふくろの好きな色の

花だ」

寺田「恐縮です」

警察服を着た二人が並んで立っている

せいか、通行人たちは緊張した顔でそ

ばを通っていく。

御子柴「ホッ、としてしまっただけ」

寺田「そうですね。やっと逮捕できましたもんね。今度という今度は起訴は免れんでしょう」

御子柴「…」

寺田「署長」

御子柴「それもそうなんだが」

御子柴、花を見下ろす。

寺田、御子柴の視線を見てから、驚いて御子柴を見る。

御子柴「痛かったろう」

車道にブレーキ痕、雨に消された人型のチヨークの痕。

御子柴「痛かったろうに」

寺田「署長」

御子柴「もっと早く守ってやればよかった。

施設に、施設に入れてやればよかった」

寺田「…」

御子柴「あんなに、俺のために生きてくれたのに。俺は、俺ってヤツは」

御子柴の目から涙があふれる。

寺田「署長」

御子柴「すまん。すまん」

寺田「謝らんでください」

御子柴「おまえは、俺のようにはならないでくれ。俺のような不義理な人間には」

寺田「自分は、署長のような警察官になりた
いです」

御子柴「親を、家族を大切にしてくれ」

寺田「署長」

御子柴、ひしゃげたガードレールに突
つ伏して泣いてしまう。

寺田、通行人たちの目を気にしながら、
御子柴を見守っている。

○（回想）警察官につづく通り（夜）

御子柴春子（45）、中華料理屋のエプロ
ンと頭巾をしたまま走っている。

息を切らし、通行人をよけながら走っ
ている。

春子「あの子は、ほんとに。ほんとにバカな
なんだから」

台詞とは裏腹に、春子の声は弾んでい
るように聞こえる。

それが、母というものなのだろう。

(了)